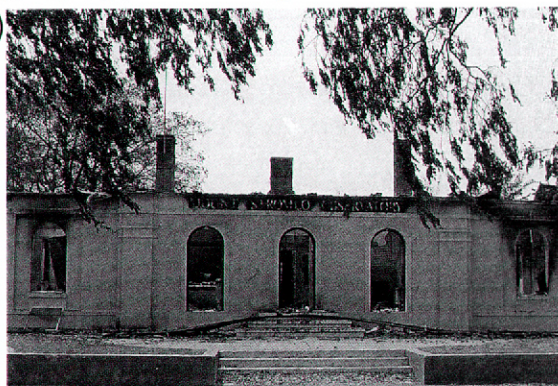


山火事に襲われたストロムロ山天文台 (オーストラリア・キャンベラ)

今年1月18日午後1時にオーストラリアの首都キャンベラ郊外を襲った山火事は、4人の死者と500戸以上の住宅を焼く大惨事になりましたが、ご存知のように、数々の歴史を持つストロムロ山天文台の大半の施設も、この火災で焼失してしまいました。幸い、天文台スタッフと学生は全員無事で、その後のスタッフや大学当局者始め関係者の献身的な努力により、約3週間後の2月11日、全員で焼け残った2棟の研究棟に戻ってきました。窓の外は、灰と焦げた幹だけの林で、その間を作業車両が行き交う異様な光景ですが、形の上では、通常の業務・研究体制に戻りつつあります。この難しい時期に、たまたま当天文台に滞在し、その一部始終を目の当たりにした者として、自身が見聞きしたことを中心に報告させていただくとともに、私たちが、どういう形で彼らをサポートできるか、考える参考になれば幸いです。

昨年来、キャンベラ始まって以来という水の使用規制が敷かれるほどの干ばつでした。そんな中、1月初めにキャンベラ西方の国立公園内で、落雷による山火事が発生しました。オーストラリアでは山火事は何ら珍しいことではなく、博物館に行けば、ユーカリは山火事で種子を撒き散らして子孫を増やし、灰を栄養にして成長する、という説明があるくらいです。1月16日、天文台から北西の山の稜線の向こうに激しく立ち上る煙が見えました。その時、報道では市街地から20キロあるから大丈夫、とのことでした。翌17日風向きが強い西風になり、煙がまっすぐ天文台方向に流れ、街全体が臭い灰のにおいに包まれました。そのころから天文台では非常用発電機を用意したり、建物の北西側に散水装置を取り付けたりしましたが、万が一ということではそれほど切羽詰った感じはありませんでした。ただ帰り際に、火が消防の作った防火線を越えたらしい、と人づてに聞き、胸騒ぎを禁じ得ませんでした。翌18日は土曜日で、キャンベラを離れて週末を楽しんでいたスタッフや学生も多かったようです。私はアパートにいて、午前中、街中が濃い煙に包まれましたが、平穏で赤い太陽が幻想的でさえありました。しかし、



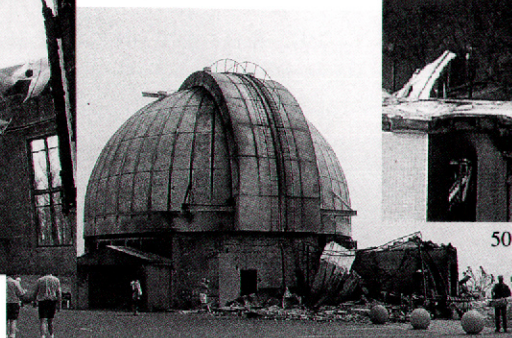
焼け落ちた歴史的建造物の管理棟

午後になって突然、聞いていた地元の音楽専門ラジオ局がサイレンを鳴らし、いくつかの住宅地区に、すぐ帰宅して家を守るように、と警報を発しました。そのころから、外は夕方のように暗くなってきて、そうこうしているうちに同じラジオ局が住宅の焼失と非常事態宣言の発令を報じました。私は心配になって、共同研究者に電話して天文台の様子を確認しましたが、何もニュースがないから大丈夫だろう、とのことでした。実はこのころ、天文台はすでに焼失していたことを後で知りました。夜の8時過ぎ、風向きが変わり、住宅街の延焼は止まりました。翌日曜日、TVニュースで火災の被害状況を見てみると、突然、ストロムロ山天文台が出てきて、無残に焼け落ちた管理棟、見る影もない50インチ望遠鏡が映し出され、一瞬体が凍りつくような感じになりました。この時ばかりはさすがに動揺しました。しばらくして共同研究者から、ほとんど焼けてしまったが、研究棟は形を留めている、と連絡を受け、翌日の会議の予定を知らされました。

後で聞いた話では、土曜日に警察が天文台とその周辺の住宅を訪れ、避難するように指示を出し、それに従った人もいれば、住宅を守ると言って残った人もいたようです。そして残った人たちも、火が迫ってきて命からがら脱出したそうです。そのうちの一人は、死ぬかと思ったと言っていました。遠くの風上側から様子を見ていた人は、ストロムロ山が燃えているとき、山の高さの2倍くらいまで炎が燃え上がっていた、と言っていました。誇張があるにせよ、松



Yale-Columbia 26 インチ屈折望遠鏡



74 インチ反射望遠鏡ドーム



50 インチ MACHO 反射望遠鏡

やユーカリが、爆発するように
一気に燃えたのは事実のようです。今

回の火災は、高温と乾燥に強い風が重なり、ある山
火事のシミュレーションより、10倍から30倍のスビ
ードで燃え広がったとのことでした。

火災の3日後、焼けた天文台へ、仕事に最低限必
要なものを取りにゆくことが許され、スタッフや学生
が2台のバスに分乗してストロムロ山に向かいま
した。途中から、かつては緑豊かだった道路両側の芝
生や森が、真っ黒に焦げた幹と厚く積もった灰だけ
の無彩色の世界に変わり、なお煙を出し続けている
光景には、言葉もありませんでした。天文台に到着
し、一つ一つ焼けた建物や望遠鏡を確かめるよう
に見て回りました。目の前に次々に展開される信じ難
い光景には、ただ絶句するしかありませんでした。
何人かのスタッフも一様に顔をしかめながら、「信じ
られない」の一言でした。結局天文台の被害として
は、キャンペラで最も古い建物の一つで国の遺産に
も指定されている管理棟（事務系オフィス、設計室、
図書館など）、現役の5つの望遠鏡すべて（74イン
チ、50インチを含む）、最終テスト中だったGemini
North用NIFSを含むワークショップ、それに8棟の
住宅が全焼、ビジターセンターと2棟の研究棟だけ
が、ガラスが割れ、灰が進入した程度で無事でした。
ほとんどの観測データや設計図などは、研究棟に残
されたコンピュータの中に保存されていたことは、
我々研究者にとって、不幸中の幸いでした。

さて、火災の後しばらくは自宅待機でしたが、
General meetingと呼ばれる会議は毎日持たれ、天文
台復帰へ向けての様々な課題の現状報告と、それに

対する質疑応答、要
望、提案がなされました。

私のようなビジターをはじめ、他大学の学部を出たば
かりのサマースクールの学生や、スタッフの家族まで
出席が許され、実にオープンな会議でした。また、新
たな課題が持ち上がった際、ボランティアの担当者
としてすぐさま手を上げる学生やスタッフが多かった
のは、皆少しでも復興の役に立ちたい、という気持
ちの表れだったのでしょうか。また、被災後すぐに、学
内の他部局から、ワークショップスペースの提供、オ
フィススペースの提供、ライブラリの利用、IT教育
用端末室の貸切使用、ティールームの無料利用、等
様々な申し出があり、私も、端末室をオフィス代わ
りの仕事場として利用することになりました。不自由
ではありましたが、好意により仕事スペースが確保で
きたことは、うれしい限りでした。

そして先にも書いたように約3週間と言う短期間
で、私たちはストロムロ山に戻ってきました。この間
の大学関係者と天文台スタッフの、ストロムロ山天
文台復興を思う熱意と前向きな姿勢、課題を解決し
ていくその信じ難いスピードに、私は、彼らがこの災
難を乗り越え、必ずや天文台を復興し、将来、これ
まで以上の優れた研究成果を生み出してくれるであ
らうことを強く確信しました。私たちにできることは
限られているかもしれませんが、知り合いに復興を願
うメールを出すだけでも、彼らにとっては強いサポ
ートになります。皆が知恵を出し合い、何らかの形で
彼らの復興に協力できれば、と考えながらペンを置く
しだいです。

西嶋恭司（東海大学理学部）